



Title	現代インドネシアにおける「中間層論」の展開とその文化的含意： 国民文化に潜在する不確かさ
Author(s)	北野, 正徳
Citation	アジア太平洋論叢. 2003, 13, p. 59-89
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99990">https://hdl.handle.net/11094/99990</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 現代インドネシアにおける 「中間層論」の展開とその文化的含意 — 国民文化に潜在する不確かさ —

北 野 正 徳\*

## 1. はじめに

本稿は、現代インドネシアにおける「中間層論」の展開を主な題材にして、それがインドネシアの国家総体に関わる文化状況、すなわち、国民文化をめぐる状況とどのような関係にあり、どのような可能性や問題を示しているかを考察するものである。現代インドネシアの中間層は<sup>1)</sup>、スハルト大統領体制(任期1966-1998年)成熟期の1980年代にその形成が確認され、1990年代に規模の拡大や構成者の多様化を経験し、現在では主に社会文化的領域(とりわけ言論の分野)で国家総体の動向に影響力を持つようになってきている<sup>2)</sup>。これに平行して、1980年代中頃から国内外の論者が中間層に関して様々な議論を行っている<sup>3)</sup>。さらに、1998年のスハルト体制倒壊以降、諸々の社会政治勢力が理想の社会や国家のあり方をめぐって言論を活発化してきたなかでも、中間層に関連深い議論がよく見られる<sup>4)</sup>。このような背景をふまえて、本稿は、中間層が主な担い手となって展開している言論や、中間層に関連深い内容の社会政治言論などを幅広く「中間層論」(以下、括弧省略)として捉えて<sup>5)</sup>、近年の中間層論の展開が、中間層の動向や諸関心とどのような関係にあり、また、インドネシアの国家総体に関わる文化状況に対してどのような意味を持っているかを考察したい。

本稿が、中間層の動向と中間層論の展開、そしてその国民文化論的意味に注目する理由は、スハルト体制時代末期から現在までインドネシアで生じてきた国家総体に関わる大きな変化を、文化論的観点から捉えてみたいからである。この変化に関

---

\* 大阪外国語大学非常勤講師

しては、現在まで、国家機構の変化や政治勢力の変動といった社会科学（特に政治学）的側面が広く注目を集め、相応の研究成果も生まれている<sup>6)</sup>。しかし、この変化の文化的側面や文化的意味については、インドネシア国内でも注目が集まらず、人文科学的な研究成果も比較的まだ少ない<sup>7)</sup>。このような状況のなかで、本稿は、中間層とその言論が近年のインドネシアにおける諸変化の文化的意味を理解するためのひとつの手掛かりになりうると考えている。なぜなら、冒頭でも触れたように、現代インドネシアの中間層は、言論などの社会文化的領域において国家総体の動向に対して影響力を持つようになってきているからである。

例えば、後述するが（第4章参照）、近年のイスラーム中間層の言論は、インドネシアという国家の一大特徴となってきた文化民族主義（＝世俗的かつ文化多元的な国民統合）に対して転換を迫る要素を含んでおり、この国家の国民文化とその伝統的枠組みに対する変化（の可能性）を示唆している<sup>8)</sup>。では、このような文化的含意がどのようなもので、また、何故インドネシア国民に広く取り沙汰されていないのかといった問いが生じてくる。そこで、本稿は、近年の中間層の動向と言論の展開、そして、そこから読み取れる文化的含意に注目して、インドネシアの国民文化（特に文化民族主義）に対してどのような状況が生じつつあるかを考察したい。このような議論を通じて、本稿は、近年のインドネシアにおける諸変化のなかで、「劇的な」外観の政治的変化のように注目を集めていないがそれにも劣らず重要と見られる文化的変化（の可能性）について考察を向けたい<sup>9)</sup>。

具体的には、本稿の方法は、1980年代から現在まで（時期区分は必ずしも厳密ではないが）、インドネシアの中間層と中間層論がどのように形成・展開し、それがどのような文化論的意味を持っているかを検討することである。そして、このことは、主に、現在までインドネシア国家総体の基本性格を構成するとともに中間層の主要関心にもなってきた三つの原理（理念）との関連から検討される。それらは、①文化民族主義（本稿では、主に文化・政治的な領域で国民統合に関わり、インドネシアの国民文化の伝統的枠組みとなってきた原理として規定している）、②近代主義（本稿では、主に経済的な領域で、経済開発政策、グローバル資本主義、物質生活の向上など幅広い近代化志向を包含する原理として規定している）<sup>10)</sup>、③民主主義（本稿では、主に社会政治的領域において世論の関心となってきた原理として規定している）で

あり、本稿は、主にこれらの観点から中間層とその言論の形成や展開を振り返る<sup>11)</sup>。さらに、個々の言論に言及する際には、その④階層的特徴(例えば、中間層のなかでもどのような集団と関係が深いかなどというような事柄)にも注意を向ける。このような方法で、本稿は、中間層の形成過程、中間層の動向と諸関心(特に①－③の主要関心)、そして中間層論の展開などの相互関係を検討してゆきたい。

続いて、議論の手順は、先ず、1980年代の歴史的背景に注目し、中間層の形成過程、中間層の特徴と主要関心、体制イデオロギー、そして、文化系知識人の言論などに言及してゆく。なお、この頃の文化系知識人の言論は、体制イデオロギーに対する対抗言論の例として検討したい。次に、1990年代を通じた中間層の拡大と階層内分化(多様化)を振り返りながら、近年の中間層総体としての関心を概括する。これに平行して、近年の中間層論の展開を、文化系知識人の言論やイスラーム諸勢力の社会政治論などから見渡して、その諸論点が中間層総体の主要関心とどのような関係にあるかを検討する。最後に、以上の事柄全体の文化論的意味を、国民文化をめぐる状況と関連付けて考察する。具体的には、近年の中間層の動向や中間層論の展開から、特に文化民族主義と深く関連しながらインドネシア国民文化の枠組みに「不確かさ」が迫りつつあることを読み取るとともに、このような状況が中間層の文化生活や文化表現においても様々な様相を伴って現れていることを検証する。このような手順で、本稿は、中間層と中間層論を手がかりにして、インドネシアの国家総体に関わる文化的変化(やその可能性)について考察を向けたい。

以上が本稿の概要であるが、本稿は、1980年代から現在に至る中間層の動向や言論を鳥瞰することから、インドネシアという国家を特徴付けてきた国民文化の枠組みに生じつつある変化の兆候を考察することを主眼にしている。そのため、本稿の議論は、中間層という具体的な社会階層に関わるものではあるが、総体的には、社会学的方法に一般的な事象叙述的議論よりも、抽象的な文化思想(イデオロギー)論に傾いていることを予め記しておきたい。また、イスラーム勢力については、筆者の専門外でもあるために、二次資料の情報をさらに単純化した扱いになっている。このような限定条件をふまえたうえで、1980年代の中間層に言及することから、本稿の議論を開始してゆきたい。

## 2. 1980年代の中間層

現代インドネシアの中間層は、スハルト体制の経済開発政策が進展した1980年代に、国内外の識者にその形成が明確に確認されるようになった<sup>12)</sup>。この頃注目された中間層の構成者は、一般に、国営・民間(その多くが華人資本)企業のホワイト・カラー、中上級の官僚や軍人、そして中小の自営業者(商業・製造業)などである。また、当時の民間部門のホワイト・カラーでは、華人系住民の占める割合が相対的に高かった。

このような中間層は、スハルト体制の政治機構と経済開発政策のなかで官僚・国軍エリートと産業資本家の権力や経済力が増大するに従って、彼ら支配層を実務分野で支える集団として形成してきた。従って、現代インドネシアの中間層は、政治的コネクションのなかで事業ライセンスを差配するといったスハルト時代に特徴的な政治経済システムの副産物として誕生したという意味で、基本的には体制に依存した存在である。このことにも関連して、彼ら中間層は、社会的位置としては支配層と被支配層(労働者、職人、雑職者、農民といった庶民大衆)の中間にあるが、その経済的地位は支配層により近く、庶民大衆の側からは富裕層とも見られうる存在でもある。このように、体制との強い結びつきと比較的高い経済的地位という二点が、現代インドネシア中間層の特徴となっていた。

ここではまず、彼ら中間層を生み出したスハルト体制を概観しよう。スハルト体制は、先述の①から③の観点から見ると、およそ次のような基本性格(主要イデオロギー)を有している。まず、①文化民族主義は、この体制の最重要原理のひとつである。ここでの文化民族主義とは、独立以来の「多様性のなかの統一」という国是にも象徴されるように、「われわれインドネシア人」という民族意識を国民統合の文化・政治的根拠とする立場で、そこでは、特定の宗教(国教)ではなく世俗的原理が重視され、地方文化(種族や習慣など)の多元性や多様性も称揚されている。ただし、そこでは、体制が指定した「公定ナショナリズム」の強い影響が存在していたことも無視できない<sup>13)</sup>。次に、②近代主義は、その経済開発政策に典型的なように熱心に追求され、物質生活における近代化志向も強い。そして、③民主主義は、理念としては称揚されていたが、実際には国家機構(特に国軍)の圧倒的優位が見られ、とりわけ、

公定ナショナリズム、経済開発、治安維持などの重要政策の実施においては、体制側の強権的性格が顕著である。このように、世俗的で多元的な文化民族主義、物質主義的近代主義（近代化志向）、そして国家権力の優位という意味での民主主義の脆弱さといった特徴がスハルト体制の基本性格を構成していた。

このような体制イデオロギーと照合すると、中間層の主な関心は次のように概括される。まず、①文化民族主義と②近代主義（特に社会経済面での）においては、彼らは基本的に体制に従っている。文化民族主義は、独立以来の国民文化の伝統的枠組みであり、また、近代主義は、彼ら中間層に様々な経済的利益を与えている。しかし、それに対して、③民主主義に関しては、体制の強権主義には同調していない。彼らが実際に体制の強権主義に公然と抵抗することは非常に稀だったが、より民主的な社会を望んでいたことは確かである。そして、このような中間層の関心は、民主的な市民社会の建設というテーマ（広義の市民社会論）を喚起しながら中間層論の展開とも結びつくことになった。

1980年代の中間層論で特徴的なものには、例えばアリフ・ブディマン（Arief Budiman）のような文化系知識人たち（社会評論やジャーナリズムでも活動的な文学者や研究者）の言論がある<sup>14)</sup>。彼らの言論は、当初は、インドネシアの社会状況に適った理想の文学のあり方をめぐる議論として誕生したが、中間層論や社会政治論としての性格も持っている。そこでは、彼ら中間層が率先して市民的良識を喚起して体制の悪い側面に抵抗することが主張されており、体制権力の強固な当時としては希少な勇気ある言論だった。

この言論は、もともとは、近代化の恩恵に浴している都市中間層（知識人や文学者も含めて）がそこから疎外されている庶民や農民にも理解・共感されるような文学作品を生み出すべきだと主張するものだった。そして、この論点が社会政治的に拡大して、この言論は、①文化民族主義に関しては、従来の公定ナショナリズムでは顧慮されてこなかった庶民大衆を文化民族主義の理念の中心に据えて体制を批判した<sup>15)</sup>。また、③民主主義についても、体制の強権主義を批判し、庶民大衆を重視する市民社会の建設を主張している。その一方で、②近代主義（特に経済開発政策）に対しては明確な賛否を表明していなかったが、富のより公平・公正な分配といった社会主義的な経済理念には共感も示していた<sup>16)</sup>。このような特徴のために、文化系知

識人の言論は、体制には「左翼的」として警戒・規制されたが、社会の幅広い層から「良心的・良識的」として共感を集めた<sup>17)</sup>。

確かに、文化系知識人の言論は、民衆重視の観点から文化民族主義を再定義し、中間層が率先して庶民大衆と連帯して民主主義を実現するように呼びかけた点で理想主義が際立っていた。しかし、④階層的特徴から見れば、彼らの議論では、中間層がどのようにして庶民大衆と連帯可能なのかは詳しく論じられていなかった。その結果、そこでは、当時の社会背景では広義の富裕層に属する中間層(知識人はさらに教育エリートでもある)が庶民大衆の苦しみや希望を代弁・代行できるというような一種の思い上がりも見られる<sup>18)</sup>。逆から見れば、彼らの言論は、インドネシアの中間層が体制に依存して存在する一方で庶民大衆との連帯を構想するがその具体的方策の手掛かりを欠いているという意味で一種の自己矛盾を抱えた存在であること、そして中間層が社会政治的变化に関与するためには彼ら自身にも一種の自己相対化や自己変革が必要であることを明らかにしていたと言える。

それでも、文化系知識人の言論は、体制権力が強固な当時の対抗言論の一例として重要である。また、彼らの言論は、当時の中間層の諸関心が、言論の場では、文化民族主義と民主主義に対する支持を中心にして展開・表現したことを示している点でも興味深い。さらに、彼らの言論が、中間層が庶民大衆との関係や民主主義の実現方法などをめぐって自己矛盾を抱えていることを示唆している点でも重要である。これらの事柄は、スハルト体制倒壊以後の中間層論(社会政治言論)においても引き続き見受けられ、近年の国民文化をめぐる状況にも関連している。では、それがどのようなものなのか、1990年代を通じて現在に至る中間層の状況と中間層論の展開を手がかりにして次に検討してゆきたい。

### 3. 近年の中間層

1990年代を通じて現在までインドネシア中間層を特徴付けてきたものは、この時期の国家経済の成長を背景にした規模の拡大と構成員の多様化(一種の階層内分化)である。なかでも、民間部門の著しい成長とともに、都市部を中心にして、従来の中間層の中から(に加えて)「弁護士、公証人、医師、技術者、大学教授、教師、経営コ

ンサルタント、会計士、ジャーナリストなどの専門職」[倉沢 1996: 104]から成る集団が形成されてきたことがある。そして、彼らは、その高い職業的地位や役割を通じて社会全体の動向にも影響力を持つようになってきている。本稿では、1990年代を通じてこのように成長してきた人々を、上流中間層と呼んで言及してゆきたい<sup>19)</sup>。また、その一方で、教育制度や情報化社会の整備を通じて、都市だけでなく周辺部や農村部でも、経済力は相対的に低いが、学歴、知識、そして社会的上昇意欲やその潜在能力において上流中間層に劣らない人々も数多く現れている。本稿では、このような人々を(その構成基準は厳密には画定できないが)、富裕な専門職集団との対照も考慮して下流中間層と呼んで言及してゆきたい。そして、これら「上流・下流」中間層の双方の形成において、土着インドネシア人(プリブミ)でイスラーム教徒の中間層が増大したことも、1990年を通じて特徴的なことだった。

このような近年の中間層をより詳しく見てみると<sup>20)</sup>、まず、中間層の経済力が、経済開発政策やグローバル資本主義の進展とともに向上したことが注目される。特に、都市部の上流中間層は、住居、消費、教育、情報など様々な領域で先進国的生活水準を獲得し<sup>21)</sup>、高度な消費生活を楽しむ「ニュー・リッチ(新富裕層)」と呼ばれる人々も少なくない。このように、中間層総体としては、時代に対する順応に成功しており、基本的には反体制的な政治行動を起こすこともない<sup>22)</sup>。もっとも、彼らの多くが高学歴で社会意識も高く、宗教にも敬虔である。しかも、彼らは中上級専門職として社会的影響力も持ちつつある。それ故、社会の多数派を占めるプリブミでイスラーム教徒の中間層(特に都市部の上流中間層)は、社会全体に変化や改革をもたらしうる存在であると見るができる<sup>23)</sup>。一方、下流中間層は、潜在的には上流中間層と同等の成功を収めうるが、特に経済面でそのような機会が十分には得られない状態にある。しかし、彼らもかなりの規模の社会集団を成し、庶民大衆とも生活意識や生活水準を共有している。そのため、民衆レベルから何らかの政治行動が起こるような場合には、下流中間層の潜在的影響力は無視できない。

以上もふまえて、近年の中間層総体の主要関心を概観すると、①文化民族主義については、スハルト体制倒壊後の現在に至っても国家全体を揺るがすような文化原理の衝突が発生していないことから見て(地方などでの局地的な衝突は深刻な問題ではあるが)、中間層総体も、基本的には従来通り、世俗的・多元的な文化民族主義



を支持しているようである。もっとも、イスラーム中間層の拡大に従い、文化民族主義に対する態度には変化が生じてきていると推測される。次に、②近代主義に関しては、上流・下流中間層を含めた中間層総体が、従来通り、特に経済生活において近代主義に従っている<sup>24)</sup>。さらに、③民主主義に関しても、1998年のスハルト体制倒壊に際してかなり多くの中間層住民も街頭行動に参加したことなどから見て、従来通り、中間層総体が民主主義の進展を希望している。ただし、民主化の方法論については、上流・下流という階層内分化にも関連して、理解の相違が生じてきていると見られる。以上のように、1990年代を通じて、中間層をめぐる総体的状況と、中間層の諸関心や社会政治的志向性などが根底から変化したわけではないが、文化民族主義や民主化の方法論に対する立場に変化や多様化も生じてきていると推測される。では、それがどのようなものなのか、1990年代を通じて現在まで展開してきた中間層論を手がかりにしてより詳しく見てゆこう。

#### 4. 近年の中間層論の展開

本章では、1990年代を通じて現在に至る中間層論(社会政治論や文化論を含む)の展開を、いささか単純化されたモデルであるが、イスラーム主義者(イスラーム的原理の絶対的権威を尊重する集団)、中道イスラーム勢力(イスラームの立場に立つが敢えてその絶対性は主張しない集団)、そして文化系知識人(前々章既出)の三者の思潮を例にして辿るとともに、中間層をめぐる状況との関連にも言及してゆきたい<sup>25)</sup>。

まず、1990年代以降、存在感と影響力を増しつつある社会政治論に、イスラーム主義者のものがある。彼らの言論は、近年、スハルト時代のイスラーム抑圧の反動もあって勢力を伸張している<sup>26)</sup>。この勢力は、極右(原理主義勢力)、イスラームに熱心な庶民大衆や下流中間層、そして都市部の敬虔なイスラーム中間層(特に上流中間層)など多様な集団から構成されるが<sup>27)</sup>、現在のところ、まだそこから政治勢力としても有力な産業資本家層が形成されるには至っていない。このように多様な構成者を反映して、彼らの立場にはそれ相応の相違があるが、イスラームの諸原理とその絶対的権威をより重視しようとする点では共通している。なお、本稿では、極右の言論に関しては直接の言及からは省略する。

イスラーム主義者の言論の最大の特徴は、①従来の世俗的・多元的文化民族主義に対して、イスラーム諸原理(究極的にはイスラーム国家)を重視することである。また、②近代主義については、グローバル資本主義やスハルト体制の経済開発主義が持つ不平等性に対しては一定の批判を向けるが<sup>28)</sup>、近代性や近代化そのものを全面的に拒否しているわけではない。実際に、上流中間層はこの利益を享受しており、庶民大衆や下流中間層はそれを熱望しているが、同時に、そこにイスラーム的理想の実現を希望していると言える。なお、③民主主義についても、他の社会政治勢力と同様に民主化を支持しているが、そこでは当然、イスラーム的理念がより多く実現されることを理想としている。

このようなイスラーム主義者の言論で特に注目されるのが、近年社会的影響力を増しつつある都市部の敬虔なイスラーム中間層(特に上流中間層)の市民社会論であり、彼らはイスラームの諸原理に則った民主社会の建設を構想している<sup>29)</sup>。もっとも、彼らの理想が容易に実現するとも言い難い。例えば、彼らの重視するイスラーム的原理は、論理的には従来の世俗的・多元的文化民族主義と対立している。また、現代資本主義や階層格差などの問題のなかで、経済的にも公正な市民社会を建設することは、彼ら中間層(特に上流中間層)に自己変革を迫るものでもあり、その実行は容易ではないだろう(注22・23も参照)。このように、近年のイスラーム主義的中間層の言論は、国民文化の伝統的枠組みに対して緊張を呼び起こすとともに(第5章でも言及)、下流中間層や庶民大衆との関係においてはインドネシア中間層が抱えてきた自己矛盾も示唆している(前々章参照)。

続いて特徴的なのが、中道的なイスラーム教徒、なかでも既存の社会政治組織としてはナフダトゥル・ウラマ(Nahdatul Ulama, 以下 NU と略記)とその左派青年(イスラーム左派と称される)に代表されるような人々の言論である。彼らは、その④階層の特徴から見れば、都市部のイスラーム(上流)中間層に較べて、地方や農村にも強い基盤を有しており、下流中間層や庶民大衆とのつながりも有している。また、組織的には、彼らは、NUの指導者でスハルト体制倒壊後初の民主的総選挙で大統領に選ばれたアブドゥルラフマン・ワヒッド(Abdulrachman Wahid, 大統領任期1999-2001年)とも近い関係にある。

中道イスラーム集団の言論の特徴は、イスラーム国家建設ではなく従来の民族主

義的国民統合を尊重することで、そのために、①世俗的・多元的な文化民族主義を支持する立場を取っている。また、②近代主義に対しても、その支持基盤に地方や農村があることに関連して、一定の批判意識を持っている。なお、③民主主義に関しては、民主的な市民社会を支持しているが、上述の都市部イスラーム主義者に較べて、地方の農民なども含んだより広範な市民社会を構想していることに特徴がある。総合的に見て、彼ら中道イスラーム集団の立場は、自分の立場(イスラーム)の絶対性を取って主張しないという意味での自己相対化が見られ、理念的側面ではより穏健かつ寛容である。しかし、その一方で、民主主義の方法論など実践面での具体性にはいささか乏しい。

そして近年、この中道イスラーム勢力の一部から、イスラーム左派と呼ばれる青年左派が誕生している[見市 2002]<sup>30)</sup>。イスラーム左派は、理論面でより先鋭的であるとともに、実践面での志向性も明確である。彼らは、①文化民族主義については、その多元性を尊重するために、(ポスト・)構造主義などの文化理論を援用して<sup>31)</sup>、イスラームの絶対的權威を大胆に相対化している。また、彼らは同じようなポスト構造主義(ポスト・モダン思想)的な観点から、②近代主義やグローバル資本主義の相対化にも関心を抱いている。さらに、③民主主義の実現については、より実践的(潜在的には闘争的)な政治活動を志向し、学生運動や NGO 活動を通じた下流中間層や庶民大衆との連携を模索している。その結果、④階層の特徴との関連から見ても、下流中間層や庶民大衆と結びついた社会政治的潜在力を持っており、この左派青年たちの存在は小集団ではあるが注目される。

以上のように、中道イスラーム集団の特徴は、理念(思想)的レベルでの自己相対化を通じて従来の文化民族主義の再検討(一種の脱構築)を試みていることである。言い換えれば、彼らの思想には、国民文化の伝統的枠組みを世界的な現代思想から再検討していることに今日的な特徴がある。もっとも、特に左派青年たちの言論に顕著なように、このように文化の相対性と多元性を尊重する思想が、民主化運動などの実践的側面と両立可能かどうかについては、議論の余地もあるように見受けられる(第6章参照)。

最後に、1990年代から現在に至る文化系知識人の言論がある。この言論は、1980年代の特徴を引き継いで、主に、ジャーナリズムや社会評論において活動的な文学

者や研究者たちのもとで展開している。彼らの活動環境は、1990年代を通じて、アカデミックな機関(特に大学)に専門化・制度化する方向を取ったが、NGO 活動やジャーナリズムとの結びつきは維持されている。このような意味で、彼らの言論は、現在もなお各種メディアを通じて社会の裾野と一定のつながりを持ち続けている。

近年の文化系知識人の言論の特徴は、イスラーム左派と同様に、ポスト・モダン思想(ポスト構造主義)やポスト・コロニアル理論などの現代思想の影響下で、理論的レベルでの自己相対化が進んだことである<sup>39)</sup>。彼らの思想は、まず、①現実問題としては文化民族主義を従来通り保持しているが、理論的には、インドネシアで神聖視されてきた民族主義を、一種の想像物として相対化している<sup>39)</sup>。次に、②近代主義についても、ポスト・モダン思想的観点から、体制の経済開発政策やグローバル資本主義などを批判的に見ている<sup>39)</sup>。また、③民主主義についても、従来通りその理念を支持しているが、1980年代の彼らの言論に見られたような指導者的態度は後退している。近年の彼らは、自己相対化を重視する立場を反映して、民主主義だけでなく、社会政治的問題一般について、特定の理念を方式化してその実現を訴えることを躊躇している<sup>39)</sup>。このように、近年の文化系知識人の言論は、自分自身の立場も含めてあらゆる既成価値観を相対化することで、批判性と寛容性(価値の多元性の尊重)を止揚しようとしている。もっとも、その一方で、実践面での方法論には乏しく、1980年代に見られたような反体制的外観も大きく後退している<sup>39)</sup>。

このような近年の文化系知識人の言論の性格は、④階層的特徴との関連においても現れている。彼らも、基本的には従来通り、下流中間層や庶民大衆との連帯を志向している<sup>39)</sup>。なかでも、自己相対化を重視する彼らの思想は、中間層自身が自己変革を通じて庶民大衆に対して開かれてゆく可能性を追求しているとも解釈でき、1980年代の彼らの言論では手付かずだった課題に取り組んでいると言える。しかし、その一方で、彼らは近年ますます専門的(学術的)な存在になってきており、彼らの意図に反して、庶民大衆との距離は縮まってはいない。しかも、彼らの思想は、1980年代のそれとは対照的に、既に庶民大衆との連帯を安易に主張するものではない。従って、彼ら文化系知識人の立場には、従来通りの理想主義の高さと同様に、庶民大衆との懸隔が存在していることも事実である。

以上、三つの思潮から四つの言論を取り上げて、1990年代から現在に至る中間層論の展開を概観してきた。そして、その特徴を、本稿の関心に従って概括すると、まず、①文化民族主義に関しては、イスラームの絶対性を尊重するイスラーム主義者と文化相対性を重視して従来の世俗的・多元的民族主義を尊重する中道イスラーム勢力および文化系知識人のふたつの立場に大別される。そして、この立場の相違は、インドネシアの国民統合や国民文化総体に関わる変化を及ぼしうるものである。次に、②近代主義については、特にスハルト体制の経済開発政策と関連して、どの言論においても一定の近代主義批判が見られる。理論面では、近代主義に対する批判は、ポスト・モダン思想に親しいイスラーム左派と文化系知識人の思想が先鋭的である。もっとも、実践面での近代主義への対抗策については、現代資本主義の修正を目指すイスラーム左派の立場も含めて、現在のところ具体的な成果が現れるには至っていない。続いて、③民主主義については、すべての思潮が民主化を支持している。しかし、民主主義の理念に関しては、イスラーム的原理と世俗的原理のどちらを重視するかで立場の相違が見られる(①と同じ構図)。また、民主化の方法論に関しては、イスラーム左派がより実践的(潜在的には闘争的)な方法を志向していたり、文化系知識人が特定の方針を主張することを躊躇していたりというように、その立場は様々である。最後に、④階層的特徴から見ると、これらの言論は、中間層における階層内分化や、中間層と庶民大衆との懸隔といった事柄とも絡み合っている。では、これらの思潮が、近年の中間層の諸関心とどのような関係にあるのか、続いて検討してゆきたい。

## 5. 中間層の関心の輪郭

第3章後半でも触れたが、現代インドネシア中間層総体としての主要関心が上述の中間層論の諸論点とどのように関係しているかは、次のように概括される。まず、①文化民族主義については、中間層総体において、少なくとも現在のところ、イスラーム主義的原理が従来の文化民族主義に取って代わるには至っていない。このことの背景には、華人など非イスラーム中間層の存在があることは当然であるが、その他にも、スハルト体制時代の悪用・操縦にも拘わらず<sup>38)</sup>、「われわれインド

ネシア人」という共同意識に根ざす従来の文化民族主義が、現在なお多くの国民から一定の支持を得ていることがある<sup>39)</sup>。もっとも、このような多くの国民が、イスラーム左派や文化系知識人が再検討しているような意味で文化民族主義を支持しているわけでもない。なぜなら、彼らにとって、自己相対化を通じて文化の多元性を尊重し合うという意味での民族主義は、容易には実践し難い思想であるはずだからだ<sup>40)</sup>。総体的には、中間層を含む多くの国民が、本稿で検討してきた中間層論(社会政治言論)に見えるような文化民族主義をめぐる理解の相違に対して深刻な問題意識を抱くには至らず、伝統的(習慣的)な愛着や信頼に基づいて従来の国民文化の枠組みを支持し続けていると推測される<sup>41)</sup>。そのために、イスラーム主義者の言論に見えるような文化民族主義に対する変化の兆しは、国民に広く取り沙汰されるには至っていないと言える。次に、②近代主義については、中間層総体としては、中間層論における経済開発主義に対する理論的批判は理解できても、実際の社会経済生活において近代主義(特に現代資本主義)を放棄することは(でき)ない状態にあり、これからも基本的には同様であろう。続いて、③民主主義は、中間層総体が支持しているが、その実現方法をめぐっては、特定の立場が優勢になるには至っていない。例えば、イスラーム主義者の市民社会論には、華人など非イスラーム中間層は従わないだろう。また、イスラーム左派の闘争的な立場は、上流中間層にとっては、彼らの利権に対する脅威となりうる。このように、民主主義推進の方法論には、中間層の中だけでさえ立場や利害の対立が絡み合っており、庶民大衆との利害関係はさらに複雑であると言える。

従って、中間層総体としては、①従来通り文化民族主義を維持し、②近代主義に対する批判も少なくとも理論的には理解して、③民主主義の向上を目指すことが、彼らの関心の輪郭を成している。しかし、そこでは、①文化民族主義や共同性理念の再検討(自己相対化)、②近代主義をめぐる理論的理解と現実生活とのギャップ、さらに、③諸々の利害対立を起こしうる民主主義の方法論(特に④階層的格差に媒介されて)などといった事柄が十分に理解・解決されていない。言い換えれば、現代インドネシアの中間層は、彼らの諸関心の理論的可能性と現実的諸条件のあいだにこのような不確かさが存在するなかで、様々な言論を展開させながらそれらの関心を追求していると言える。

では、このような不確かさのなかで、彼ら中間層がその諸関心を追求すると、文化的側面、特に国家(国民)総体に関わる文化的側面において、さらにどのような影響や問題が生じてくると考えられるだろうか。このような意味での中間層の動向や言論に潜在する文化的含意(リスクや不確かさ)を、続いて検討してゆきたい。具体的には、このような文化的含意を、主に近年の中間層論の諸論点から読み取り、それが国民文化の伝統的枠組み(文化民族主義)とどのように関連しているか、また、彼ら中間層が中心となって営まれている文化生活や文化表現においてどのように現れているかを検討したい。以上のことをふまえて、ここからは、近年の中間層論の展開から読み取れる文化的含意に焦点を移して議論を進めてゆきたい(以下、①-④の分類表記は省略)。

## 6. 中間層論の文化的含意

まず、このような文化的含意として最も注目されるものは、インドネシア国家の大きな特徴となってきた国民文化の枠組みである文化民族主義に、形骸化と表現できるようなリスクが迫っていることである。前章でも触れたように、文化民族主義は、スハルト体制の悪用や操縦にも耐えて、中間層も含めた多くの国民に現在も支持されている。しかし、近年、イスラーム主義者の言論にあるように、従来の文化民族主義と相反する立場も現れている。このことは、国民文化の枠組みに変化を及ぼすものであり、潜在的には、従来通り文化民族主義を信頼する人々に対して、自己の立場の相対化と国民の共同性に関する理念の再検討を迫っている。しかし、国民の多くはこのような自己相対化の必要性を意識するに至らず、伝統的(習慣的)な愛着や信頼に従って文化民族主義を支持しており、そこに生じつつある不確かさに対して危機感や問題意識を抱いて大きく取り沙汰すには至っていない。このような意味で、近年の中間層論からは、従来の文化民族主義が、イスラーム主義者の思想と言論によって揺さぶられているだけでなく、まさにそれが批判的な再検討なしに信頼され続けているために形骸化してゆくリスクを持っていることが読み取られる。

続いて、中間層がこのような自己相対化と共同性理念の再検討を意識した場合、論理的には、それは文化民族主義のみならず近代主義や民主主義にも波及してゆく

ことが注目される。そして、このことは、そのような波及過程が中断している NU 的な中道イスラーム勢力の言論から知ることができる。彼らは、イスラームの絶対性を退けて、自己相対化した文化民族主義を支持している。このように再検討された文化民族主義は、中間層だけでなく、国民一般にとって穏健かつ寛容な共同性原理となるであろう。しかし、その一方で、この集団は近代主義や民主主義に対しては具体的な方法論を明確にしていなかった。その結果、この立場を掲げたワヒッド・大統領体制も、近代主義や民主主義などとの関連においては具体的な変化をもたらす間もなく終了した。また、実際に、この集団からイスラーム左派が誕生し、より先鋭的な近代批判とより実践的な民主化を主張していることも、文化民族主義のみを表面的な意味合いで自己相対化することの限界を示している。理論的に見ても、上述のイスラーム左派や文化系知識人の思想から明らかなように、文化民族主義の自己相対化は、ポスト構造主義のような近代主義の相対化に向かう思想と強く結びついている。従って、中間層にとって、文化民族主義の自己相対化は、彼らに近代主義や民主主義の理念に対する自己批判的な再検討も迫るものである。逆から見れば、このために、この種の自己相対化の観点が中間層も含む多くの国民に現在も浸透せず、文化民族主義(国民文化の粹組み)にも形骸化のリスクが忍び寄りつつあると考えられる。

さらに、仮に彼ら中間層に、文化民族主義の再検討(自己相対化)、近代主義の相対化、そして民主主義の追求という三つの理念が揃ったとしても、それが実践に移される際には、特に思想(文化)的な側面が毀損するリスクも見て取れる。そして、このことは、イスラーム左派の言論が良い例になると思われる。彼らは、自己相対化を通じた寛容な民族主義、ポスト・モダン思想的な近代主義の相対化、そして下流中間層や庶民大衆との連帯を通じた実践的(潜在的に闘争的)な民主化という三つの理念を同時に追求している。加えて、彼らは、中間層自身の自己変革(特に経済生活における近代主義の相対化)を通じて庶民大衆との連帯を志向している点で、中間層という社会集団が抱える自己矛盾(第2章後半参照)にも答えようとしている。このような意味で、左派青年たちの思想は、優れて理想主義的である。しかし、彼らの理想には、実践に移される際にその文化的側面が傷つくリスクがあるように見える。まず、自己相対化と多元性を尊重する寛容な文化民族主義という思想が、下流



中間層や庶民大衆との連携による民主化運動(闘争)という方法論と容易に両立するとは想像し難い。なぜなら、下流中間層や庶民大衆の多くが、実際にはこのような民族主義の再検討とはまだ無縁であり(前章参照)、なかにはイスラーム主義的イデオロギーに惹かれている者も少なくないからである。さらに、近代主義の相対化という課題が、下流中間層や庶民大衆との連携から容易に実現できるとも想像し難い。なぜなら、彼らが一般に先ず望んでいるものは、経済力や生活水準の向上といった近代(主義)的な利益であるからだ。このように、イスラーム左派のラジカルな立場には、文化論的観点からその理論的可能性と現実的諸条件とを照合すると、民主主義の政治的追求が文化民族主義の再検討を阻害したり、実際には近代主義の思想的相対化と相反しうるといった、国民総体に関わるリスクや不確かさがあることが見て取れる。インドネシアにおいても、世界の諸国と同様に、中間層内の諸格差、中間層と庶民大衆との諸格差、そして、この種のリスクに対する国民に総体的な関心の低さといった問題が、文化(思想)的観点から民族主義を再検討したり近代主義を相対化することに対する障壁となっており<sup>42)</sup>、この種の障壁がインドネシアの国民文化をめぐる状況においても早急に解決されるとは予想し難い。このようなことから、イスラーム左派のラジカルな立場は、その主要理念のあいだの微妙で脆い均衡のもとで構成されていることが理解される<sup>43)</sup>。

最後に、以上のような、国民文化の伝統的枠組みの形骸化や、民主主義の政治的実現と民族主義の文化的再検討とのあいだの相反関係といった事柄との関連から見ると、近年の文化系知識人の言論が、このようなリスクに敏感な(悪く言えば老獪な)反応を示していることが理解される。彼らは、上述のイスラーム左派青年と同様に、自己相対化の観点から従来の文化民族主義と近代主義を批判検討している。なかでも、彼らの文化民族主義に対する再検討は、その理念の形骸化を阻止するための試みであるとも解釈できる。さらに、彼らは、理念としては民主主義を支持している。しかし、その実現方法を方式化することは躊躇しており、この点ではイスラーム左派とは対照的である。ここでは、文化系知識人が民主主義の政治的追求が彼らの思想的立場(文化民族主義と近代主義の相対化)に対するリスクとなることを見ていたと推測される。このような文化的リスクが、少なくとも現在のインドネシアの社会文脈においては、早急に解消するとは想像し難い。そして、このような

状況のもとで、イスラーム左派が社会参加や政治関与に対する情熱を表明する方向に駆られたのに対して<sup>49)</sup>、文化系知識人はこれらのことについては沈黙することに傾いたとも言える。このようなことから、近年の知識人の言論は、インドネシア国民総体に関わる文化的リスクとも深く関連していることが理解される<sup>49)</sup>。

およそ以上が、近年の中間層とその言論から読み取れる文化的含意(リスクや不確かさ)である。そして、それらは、必ずしも文化民族主義などの抽象的概念そのものには触れていないが、中間層が主な担い手になって展開している文化生活や文化表現のなかでも見受けられる。言い換えれば、このことは、このようリスクや不確かさのなかでインドネシア国民が、自分と同胞、社会、そして政治とのつながりをどのように見て、どのようなアイデンティティーの意識を抱いているかを表すものでもあると言える。では、そのような例をいくつか紹介して、中間層論で見てきた諸論点との関連にも言及しよう<sup>49)</sup>。

## 7. 文化表現との関連

まず、この種の文化表現の好例として、文化系知識人によるエッセーや創作作品がある。彼らは、近年の国民文化に潜在する諸問題について、その理論的背景(主に西欧の現代思想)に最も良く通じた表現者に属する。そのために、彼らの表現物は、外観的には西欧の知的流行の影響が顕著であるが、内容的には世界的な現代思想とインドネシアの社会文化的文脈との接点に触れようという意欲を伝えてくる<sup>47)</sup>。

このような外観と内容を持った表現物として代表的なのは、アリエル・ヘルヤント(注34に既出)やグナワン・モハマッド(注35に既出)などの著作であろう<sup>48)</sup>。前者は文学・社会学研究者、後者はジャーナリストとして、ともに数多くの著作を出版し、彼らの新聞・雑誌におけるコラムやエッセーは、一般読者にも読まれている。彼らの著作に共通しているのは、ポスト・モダン思想のいわゆる脱構築批評で、彼らはこの観点から(文化)民族主義や近代主義などを含めてインドネシアで通用している多くの既成通念を相対化している。また、創作作品の分野でも、例えば、アユ・ウタミ(Ayu Utami)の1998年の小説『サマン(Saman, 主要登場人物のひとりの名前が題名である)』などは[Ayu Utami 1998]、体制の横暴、権力に立ち向かう人間が経験

する個人的信条と政治的行動との間の葛藤、さらには女性の性行動と性意識(婚外交渉を含む)などといった、それまでインドネシアでは文学界でさえタブー視されてきた様々な話題を取り上げて、体制批判や既成通念の相対化を行っている。しかも、そこでは、安易な問題解決は想定されず、こうした束縛の続く状況こそが社会現実であるとも示唆されている。このように、文化系知識人の表現物は、既成の価値体系に揺さぶりをかけて国民総体に関わる潜在的な文化問題を明るみに出そうとする性格のものである。また、これらの表現物は、その内容から見て、スハルト体制末期頃から社会政治の機構的側面で生じてきた諸変化(国家的危機)の意味を文化的観点から読解・再表現しようとするものでもあると言える。このような性格であるために、彼らの表現物が、どれほど多くの一般読者にどの程度理解・共感されているのか、また、読者に社会とのつながりを再確認させてくれるものであるのか正確に言い当てることは難しい。しかし、彼らの著作がかなり広くの読者層に届いていることは事実であろう。

続いて、都市の中間層(特に上流中間層)の感受性と一種の対応関係にある文化表現として、テレビや映画などのドラマ作品があると思われる。この種の作品の多くは、都市の中間層を舞台にしたホームドラマやメロドラマを基本様式にしており、一般に、中間層の生活様式を肯定的に描いている。加えて、近年では、社会批判や民主化といった話題を盛り込んでいる作品もある。もっとも、総体的には、それらは視聴者に対して、既成通念の相対化よりも、それとの調和を囁きかけるような性格である。例えば、2001年に大ヒットした青春映画『チンタに何が起こったの? (*Ada Apa dengan Cinta?*; チンタは主人公の名前)』は、その好例であろう<sup>49)</sup>。この作品は、ジャカルタの上流中間層家庭の女子高生チンタと同級の少年ランガとの恋物語であるが、興味深いことに、作中では宗教性が取り除かれていたり<sup>50)</sup>、詩の創作コンテストという設定のなかでインドネシア語が国家統一言語として称揚されていたりして、従来の文化民族主義に対する支持が示唆されている。また、ランガの父(学者)がスハルト時代に体制批判の著作を発表したために現在も嫌がらせを受けているというような設定で、社会政治批判のニュアンスも伝えてくる。もっとも、作品全体としては、グローバル資本主義の産物に満ちた生活様式を楽しむ上流中間層の少女が恋と友情(他の学友との)を「思い通りに」実らせるということ以外に主題ら

しきものは見出し難い<sup>51)</sup>。言い換えれば、作中で仄見えている社会政治的関心も、民族主義の再検討や民主主義の実現方法といった事柄にまで立ち入ることはなく、作品全体としては、登場人物(中間層)の関心事が自分たちに「都合の良い」かたちで追求されているような傾向が目立っている。そのため、この作品のそこかしこで称揚されている文化民族主義についても、視聴者である多くの国民にとって、実際にはその意味内容が不確かなままであり、このような意味で形骸化のリスクを有していると言える。このように、中間層のなかでも上流中間層が主な製作者でも消費者でもあるような文化表現においては、総体的には、彼らの諸関心に都合の良いように民族主義や民主主義といった国民的理念が使用される傾向が見られる。このことが、無意識的な操作なのか、それとも、例えばメディア商品生産のための一種の自己検閲なのか容易には判断はできないが、少なくともこのような性格の映画作品が近年でも大きな人気を博しているという意味で、中間層のかかなり多くの人々がこの作品が描くような視座のもとで、自分の社会的アイデンティティを了解したり、理想の社会像を思い描いたりしているものと推測される<sup>52)</sup>。

最後に、下流中間層や庶民大衆との関連で興味深い文化表現として、ポピュラー音楽がある。そこでは、より直裁に体制批判や民族主義への共感が表現されていることがある。例えば、現在全国の多くの若者から大きな支持を集めているロック・グループのスランク(Slank)は、スハルト体制がまだ強固だった1990年代前半から体制批判を歌うとともに、民衆や農民、そして祖国に対する共感や愛情も歌っている<sup>53)</sup>。もっとも、彼らの歌には、体制批判を行う彼ら自身の立場を相対化したり、彼らの愛する祖国に潜む民族主義の形骸化の危険に関心を向ける様子はない。また、彼らの共感する農民と民主主義をどのように実現するのか、またその際にどのような文化的リスクがあるのかといった事柄に対する関心も見られない。総じて、彼らは、自分たちの関心とそれを取り巻く現実とのあいだに存在する問題(不確かさ)に対して無知あるいは無関心である。そのため、彼らがその方法論に対して無関心なままで称揚している共同性理念(例えば祖国愛)は、彼らの聴き手である全国の若者たちにとっても、厳密には不確かなままであろう<sup>54)</sup>。以上のように、文化系知識人の表現物とはいささか対照的に、映像作品やポピュラー音楽などの文化表現においては、中間層の諸関心の理論的可能性と現実的諸条件のあいだに存在している懸隔

に対して、見方が偏っていたり、問題意識が欠けていたりしており、このこと自体が、潜在的には、国民総体に関わるひとつの文化的リスクとなっていると言える。

このように、これらの文化表現にはそれぞれ「欠点」も見られる。文化系知識人の著作はエリート主義的、映像作品は手前勝手、そしてポピュラー音楽はナイーブである。しかし、製作者の態度や意欲に注目すれば、これらの表現物が、商業主義の枠組み、グローバルな文化画一化、権力側の規制といった諸制限のなかで、彼ら中間層が中心になって主体的かつ誠実に、同胞との共同性や社会とのつながりを思い描いたものであることも確かである。そして、受け手たちも(その多くが中間層である)、これらの社会的想像物を、時には自分に都合よく消費したり、また、時には誠実に受け止めたりするものと推測される。このように、中間層の諸関心は、そこに潜在するリスクや不確かさとともに、彼らの文化生活に織り込まれ、解釈され、メディア商品としても加工され、再表現され、消費され、伝播してゆく。そして、こうした過程で形成・更新してゆく中間層文化は、そこに潜在する文化的含意とともに、インドネシア国家総体の動向にも関わっていると言えよう。それ故、インドネシア国家総体の動向を言論や文化表現などを通じて理解してゆくことにおいては、これから中間層は注目に値する存在であると言えることができる。

## 8. おわりに

以上のように、本稿は、現代インドネシアの中間層とインドネシア国家総体に関わる文化状況との関係を検討する目的で、1980年代から現在に至るインドネシア中間層の動向と彼らの諸関心を概観した(第1-3章)。そして、近年の中間層論の展開を、いくつかの思潮から概括し、それらが中間層の諸関心とどのような関係にあるかを見てきた。そこでは、中間層総体の主要関心は、国民文化の伝統的枠組み(文化民族主義)を維持し、特に経済生活面で近代主義に従い、そして、民主主義を支持することだった(第4-5章)。しかし、このような中間層の関心を、その現実的諸条件と照合して見れば、そこには、従来の文化民族主義が形骸化することや、民主主義の政治的実現が民族主義の文化的理念を毀損することなどといった国民総体に関わる文化的なリスクや不確かさが潜在していることが読み取れた。しかも、このような

潜在的な不確かさは、中間層内の諸格差、中間層と庶民大衆との諸格差、そしてこの種のリスクに対する国民に総体的な意識や関心の低さといった、インドネシアの社会文化に構造的な諸問題とも絡み合っており、容易には解決されないものである(第6章)。以上のようなことが、本稿が意図する意味での近年の中間層論から読み取れる文化的含意であると言えるが、このような国民文化に潜在する不確かさは、同時代の文化表現においても諸々の様相を伴って現れている(第7章)。以上のことを、現在インドネシアで中間層の社会的、文化的、そして(潜在的には)政治的な役割や影響力が増大していることと合わせて考慮すると、中間層の動向は、インドネシア国家総体の動向を理解してゆくうえで、これからも注目に値すると言うことができる。

なお、本稿では、中間層の動向を、特にその階層内格差や庶民大衆層との格差という観点から詳しく検討することができなかった。また、このような階層格差の観点を、新旧の社会政治勢力(特に近年のイスラーム勢力)の動向やグローバリズムの進展などと関連付けて考察するにも至らなかった。これらの事柄を総合して考察することは、中間層にとどまらず、インドネシア国家総体の動向に注目してゆくうえで重要であると考えられる。以上のような今後の研究可能性にも触れたうえで、本稿の議論を締め括りたい。

## 注

- 1) 本稿は、「現代インドネシアの中間層」という用語で、主に、スハルト体制時代に注目されだした中間層に言及している。この中間層に対して、注3で触れるいくつかの論考は、スハルト時代に特徴的な新しい中間層という意味で「新中間層」という用語を充てているが、その指示内容は本稿の「中間層」と基本的に同じである。
- 2) 現在、インドネシアの各種メディアの主な担い手が中間層である(製作者・享受者双方において)という一例からも、近年のインドネシア中間層が、ひとまとまりの強力な政治勢力として形成されてはいないが、特に世論形成などの言論を通じて国家総体の動向に影響力を持つようになってきていることが理解される。
- 3) 現代インドネシアの中間層に関する論考としては、今野[2000]、倉沢[1996]、中村[1994]、Tanter and Young [1990, 1993] など既にかなりの数量が出版されている。なお、1990年代中頃までの文献資料については、倉沢[1996: 123-126]に詳しい。

- 4) なかでも、本稿でも触れる近年のイスラーム諸勢力(特にイスラーム中間層)の動向に注目した論考としては、Hefner [2000]、見市 [2000, 2002]などがある。
- 5) 注2でも触れたように、各種メディアの主な担い手が中間層である点で、現在インドネシアで広く流通している言論の多くが、基本的には、本稿の言及する意味での「中間層論」であると言える。もっとも、厳密には、「中間層が主な担い手になっている言論」が基本的には「インドネシア中間層が」展開させている言論であるのに対して、「中間層に関連深い内容の社会政治言論」のなかには「国内外の論者による」議論も含まれており、それぞれの性格は少し異なっている。もっとも、本稿は、これら二種類の議論に共通する諸論点から近年の中間層の言論の文化的意味を検討するために、これらの議論をひとつの文脈設定にまとめて論じてゆきたい。
- 6) このような政治研究で日本語で読める一例として白石 [2001] があり、そこでは、近年のインドネシアにおける政治的意味での国民統合の危機も指摘されている。
- 7) スハルト体制のイデオロギー構造に対する検討を通じて文化論的観点からスハルト時代に対する一定の総括を試みた議論の一例として、北野[2002]が参照できる。
- 8) 近年のインドネシア国家総体に関わる文化的変化(の可能性)を考えるにあたっては、他の東南アジア諸国に比しても特徴ある強固さで現在まで称揚されてきた文化民族主義に注目することが重要となると考えられる。
- 9) 逆から見て言い換えれば、このような問題設定は、「レフォルマシ(reformasi, 改革)」という流行語とともに「劇的な」外観の政治的変化(政変や政争など)が繰り返されているにも拘わらず文化的な観点からはこの流行語が意図するような変化が訪れていない現在のインドネシアの文化状況について考察を向けるものである。
- 10) 本稿の「近代主義」は、主に経済面に関わる用語として使用されているが、ここでの「近代化志向」という表現から推測されるように、社会風潮や文化習慣といった社会文化的側面での近代主義としての意味合いも持っている。とりわけ、本稿中盤からの議論は、文化的な意味合いに傾いたかたちで近代主義という用語を使用している。補足して言えば、現在までのインドネシア国家総体の営みは、文化論的観点から見れば、本稿の言うような意味での近代主義(近代化志向)に貫かれてきた。
- 11) ここでは、これら①から③の用語は、政治学や経済学など研究者側のディシプリンにおいて規定了解されている意味に厳密に基づいて使用されてはいないことを予め記しておきたい。むしろ、これらの用語は、インドネシアの文脈(特に中間層の言論)において理解・表明されている中間層の関心やイデオロギーを要約表現するものとしての性格が強い(文化記号学などでのいわゆる「言説」に近い)。なかでも、本稿の「文化民族主義」と「民主主義」は、用語それ自体もその指示内容も、インドネシアの中間層の言論における用法とほぼ同じである。なお、「近代主義」については、上記注10を参照。
- 12) 本稿では現代インドネシア中間層の構成員をめぐる詳しい議論は行わないが、中間層構成員の職種や収入などについては、今野[2000]、倉沢[1996: 103-106]、中村[1994: 275-280]などを参照できる。なお、どの程度の収入が中間層の基準となるのか厳密な算定は困難であるが、生活様式という観点から見れば、先進国と同等、あるいはそれに準じた生活が

できることがひとつの目安になっている。

- 13) インドネシアでは、独立以来、民族主義を基礎にしたうえにいくつかの理念が特に強調されることで公定ナショナリズムが形成されてきた。このような公定ナショナリズムは、スハルト時代には、パンチャシラ(Pancasila, 国家五原則)として方式化・制度化されて確立した。そこでは、基本的には国民統合における世俗性と多元性が称揚されているが、この原則は体制によって恣意的に行使された。例えば、世俗主義重視という理由でイスラーム(特に原理主義的右派)が抑圧されたり、多元性尊重の前提に反して、反華人政策が進められたりした。なお、公定ナショナリズムと国民文化との関係についてはFoulcher[1990]、北野[2002]が参照できる。
- 14) 以下で検討する文化系知識人の言論は、一般には「社会文脈文学(sastra kontekstual)」をめぐる論争と呼ばれている。この思潮については、Ariel Heryanto[1985]、北野[2002: 49-52]、松尾[1993: 39-40]などを参照。
- 15) スハルト体制は、理念としては民衆重視の民主主義を称揚していたが、実際には政治安定(治安維持)の脅威となりうる庶民大衆をしばしば抑圧していた。また、その経済開発政策も貧富の差を拡大させる性格が強かった。
- 16) 例えば、当時のアリフ・ブディマンがその代表的人物である。
- 17) このような「良心的」文化系知識人のもうひとりの例として、作家プラムディア(Pramoedya)を挙げることができる。彼は、1965年の共産党による(とされる)クーデター未遂事件の後、共産主義者の嫌疑で逮捕された。そして、流刑先の離島の過酷な環境のもとで、民衆重視と多民族性尊重の観点からインドネシア民族主義(独立)の源流を辿り直すような内容の小説を書き、釈放後の1980年に出版して大きな反響を呼んだ[Pramoedya 1980 a, b]。彼の命懸けの作品執筆は、良心的文化系知識人を象徴するものとして広く国民の共感を集めた。
- 18) このことについては松尾[1993: 39-40]を参照。また、このことは、近年のポスト・コロニアル研究における「サバルタン(従属階級)論」とも関連が深い。
- 19) 注1にも関連して、例えば倉沢[1996]などの使用する「新中間層」という用語は、本稿がここで使用している「上流中間層」に注目する意味合いを持っている。
- 20) この段落の記述は、主に小池[1998: 184-193]、倉沢[1996: 100-114]などを参照している。また、インドネシアも含めた近年のアジア諸国の中間層とその生活様式については、Chua[2000]、Robison and Goodman[1996]などを参照。また、Chua[2000]については、高山[2002]の論評を日本語で読むことができる。
- 21) この時期の中間層の経済力や消費生活の特徴については、Ariel Heryanto[1999]、小池[1998: 184-193]、倉沢[1996: 104-114]などを参照できる。
- 22) 中間層(特に上流中間層)の社会政治変革に対する可能性については、例えば Ariel Heryanto[1996, 1999]や倉沢[1996: 114-123]などの議論を参照できるが、中間層総体としては、社会関与よりも経済活動(ビジネス)や消費生活をより熱心に追求している点で、中間層総体が直ちに社会政治変革に寄与するものと期待するのはいささか早急であると見られる(次の注23も参照)。



- 23) 次章でも触れるが、(特に都市部の)敬虔なイスラーム中間層(特に知識人や上級専門職集団などの上流中間層)に社会政治変革の動力としての可能性を見る議論があり [Hefner 2000, 中村 1994]、彼らの動向は今後とも注目される。もっとも、注22でも触れたように、イスラーム教徒も含めた中間層総体(特に上流中間層)が直ちに社会政治変革に寄与するものと期待するのはいささか早急であると見られる。
- 24) もっとも、近年の世界的なイスラームの活発化には、欧米標準のグローバリズムの進行に対する反発としての側面があり、インドネシアにおいても例外ではない。
- 25) 本章の記述、とりわけイスラーム社会政治勢力の言論に関する記述の多くは、見市 [2000, 2002]で言及されている情報に基づいている。特に後出する「イスラーム主義者」や「イスラーム左派」などの用語も、彼の論考の用語を借用している。もっとも、本稿が中間層論から読み取れる文化論的意味(政治的意味よりも)に注目しているために、本章のイスラーム社会政治勢力に関する記述は、彼の実際の議論を大きく単純化(モデル化)したものであることを予め記しておきたい。
- 26) 注13でも触れたが、スハルト体制は、原理主義的イスラームを国家統一の脅威と見て、イスラームと政治活動の結びつきを制限する政策を取ってきた。
- 27) 一例として、都市部の敬虔なイスラーム中間層(特に学生)の支持を集めている既存政党には、正義党(Partai Keadilan)がある。
- 28) 注24でも触れたように、近年の世界的なイスラーム思想の活発化は、欧米標準のグローバリズムの進行に対する反発としての側面を持っている。
- 29) この集団が構想する市民社会にはイスラーム的理念が顕著で、インドネシア語で「マシヤラカット・マダニ(masyarakat madani)」(マダニはアラビア語に由来しイスラーム聖都のひとつメディナと同語源)と表現され、「メディナ的なイスラーム社会」を理想視している。この用語については、例えば見市[2000:163-170]を参照。なお、彼らの市民社会論の社会政治的可能性については、注22・23も参照。
- 30) 実際には、「イスラーム左派」とも似通った中道的イスラーム中間層の別のグループとして、「リベラルなイスラーム者のネットワーク(Jaringan Islam Liberal)」も存在する(ジャカルタが拠点)。この集団も、イスラーム左派と同様に、基本的にはイスラーム権威の相対化や民主化推進を志向している。また、このグループは、文化系知識人の有力サークルとも活動拠点を共有するなどの交流を有している(本文の続く記述と注35を参照)。もっとも、本稿では、文化民族主義に対する態度と政治的志向性の明瞭さにおいて、イスラーム左派に注目することを選び、「リベラルなイスラーム者のネットワーク」に直接は言及しないことにする。なお、このグループについては、Jaringan Islam Liberal [2002]が参照できる。
- 31) ここで言及されている(ポスト・)構造主義は、西欧近代の思想が一般に信奉する実体主義(あらゆる事柄には単一の原理が存在するという信念)を批判するような思想的立場のことを意味する。その結果、この思想は、西欧的近代主義に対しても同様に批判的で、このような意味合いでポスト・モダン思想とも呼ばれている。
- 32) このことについては Ariel Heryanto [1995]、北野[2002: 52-54]を参照。

- 33) その一例として、文芸評論家のニルワン・デワント (Nirwan Dewanto) は、民族主義という理念は、基本的には西欧近代に由来し、この歴史浅い外来概念をインドネシア人は国民的アイデンティティーとして神聖視してきたと批判している。同時に彼は、このような歴史的素性を持ったインドネシアの(文化)民族主義に西欧近代の植民地主義の痕跡も見ている[Nirwan Dewanto 1994 : 7-8]。このように、インドネシアの文化系知識人の認識においては、ポスト・モダン思想とポスト・コロニアル理論が交差する地点で従来の文化民族主義が相対化されることが見られる。
- 34) その一例として、文学・社会学者のアリエル・ヘルヤント (Ariel Heryanto) は、西欧の近代主義は植民地主義だけでなく、インドネシアも含めたポスト・コロニアル諸国の経済開発主義をも生み出したと見ている [Ariel Heryanto 1994 : 93]。
- 35) その一例として、ジャーナリストのグナワン・モハマッド (Goenawan Mohamad) は、ポスト・モダン思想を、政治的理念も含めたあらゆる事柄を方式(カテゴリー)化して認識・議論することを全体主義的論理として退けるような思想であると理解し、この思想に共感を示している[Goenawan Mohamad 1994 : 76-77]。なお、注30とも関連して、彼は、1990年代中頃から文化系知識人の有力サークルとして形成されてきた「ウタン・カユ地区のコミュニティ (Komunitas Utan Kayu)」の中心人物で、文化系・イスラーム系双方の知識人と幅広い交流を有している。
- 36) もっとも、注35で触れたグナワン・モハマッドなどの文化系知識人も含めて、中間層が体制の強権主義に対して全く抵抗を試まなかったわけではない。例えば、1990年代中頃までの時期に中間層が体制に対してどのような抵抗を試みてきたかについては、Ariel Heryanto [1996] の記述を参照できる。
- 37) 例えば、注33から35で言及してきた文化系知識人たちは、それぞれの論稿のなかで、現代思想を庶民大衆や社会変革のために役立てたいと発言をしている[Ariel Heryanto 1994 : 92, Goenawan Mohamad 1994 : 79, Nirwan Dewanto 1994 : 9]。
- 38) 注13や注15でも触れたように、スハルト時代、文化民族主義などの国家的理念は、体制や権力者によって、彼らの利益に奉仕するイデオロギーとして機能するように様々な悪用や操縦を受けていた。
- 39) 第3章後半でも触れたように、少なくとも現在まで、イスラーム主義者の立場も含めて、従来の文化民族主義を否定する何らかの立場が、国家(国民)全体を揺るがすような文化原理の衝突を起こすには至っていない。
- 40) インドネシア民族主義は、特に独立後の公定ナショナリズムとの関連で、インドネシア対オランダという対立構図の神話化のもとで定着してきた。それ故、多くの国民は、オランダに対する自己主張としての側面には親しんでいるが、「インドネシア」の内容を客観的に振り返ることには疎い。また、公定ナショナリズムにおいては、国家統一が極めて重視されていたため、理念としての民族の多元性は称揚されていたが、実際には民族(国民)全体の統一性がより強調されていた。これらのことから、多くの国民にとって、自己相対化を通じて民族(国民)の多元性を尊重するというような意味での民族主義は、容易には実践できないと推測される。

- 41) 本稿冒頭で触れたように、これらの中間層の言論が各種メディアを通じて国家総体の動向に影響力を持ちつつあることは事実であるが、その主な担い手が知識人層であるために、その実効的な射程や影響力はまだ限られていると推測される。
- 42) 例えば、現代タイのナショナリズム(民族主義)について、河森正人は、国民のあいだの階層的亀裂が中上流階層中心主義的な従来のタイ・ナショナリズムを内部から綻ばせてきていると指摘している[河森 2002:15-18]。これまで論じてきたように、インドネシアの文化民族主義においても事情は似ているが、インドネシアの場合、多くの国民がこの現状に深刻な問題意識を抱いて取り沙汰すには至らず、伝統的(習慣的)な信頼や愛着に従って文化民族主義を支持し続けている。本稿は、このような状況に、文化民族主義の形骸化のリスクが見えていると言及している。
- 43) このことは、例えば1998年の政変(スハルト体制倒壊)のような、民衆レベルから政治行動(闘争)が生じた場合を想起すれば理解しやすいと思われる。この政変は、暴動・略奪・強姦殺人など悲惨な痛みを伴ったが、とにかく庶民大衆や中間層が政治的变化をもたらした事例でもある。しかし、物理(身体)的な政治危機が一通り收拾した現在でも、これまで深く傷ついてきた国民の共同性を再建するという文化的課題は、総体的には停滞している。従って、政治改革と文化批評を同時追求するイスラーム左派の立場は、1998年の政変から現在までの事例で見られるような政治行動と文化批評との間の乖離(相反関係)がこれからもインドネシアで繰り返されるであろうと示唆している点で「微妙で脆い均衡」にあると言える。なお、筆者は、本稿作成の時点では、イスラーム左派のラジカリズムがこのようなリスクを自覚のうでで表明されているのか、それとも、ナイーブな主張に傾いているのか正確に判断できておらず、このことは、今後の検討課題として残っている。
- 44) このような文脈では、イスラーム左派の態度には、戦略的計画性よりも道義的関与意識がより顕著で、1980年代の文化系知識人の言論と似通っていると言える。
- 45) もっとも、現実生活において下流中間層や庶民大衆とのつながりがより強いイスラーム左派の立場から見れば、このような文化系知識人の態度は不満を抱かせるものであろう。なぜなら、文化系知識人の多くは、現実生活では大学やメディアで収入と地位を確保し、いつでもそこに退却可能な立場にあるからである。
- 46) このような問題関心は、近年の非西欧諸国(諸地域)の文化表現においても適用できるものである。例えば、現代タイのメディア空間における中間層のアイデンティティー意識に関わる論稿として、注42でも言及した河森[2002]がある。
- 47) もっとも、ポスト・コロニアル理論などの視点から、インドネシアにおける(に關する)知的営為に潜在している西欧(特に西欧人インドネシア研究者たち)の影響を、一種の知的・思想的支配として問題視するような立場も現れている[Philpott 2000]。
- 48) 彼らの著作の例として、Ariel Heryanto[2000]、Goenawan Mohamad[1982,1989,1995a, 1995b, 2002]などがある。
- 49) この映画作品に関しては <http://www.adaapadengancinta.com/> を参照。
- 50) 作中では、主人公チンタの親友が父親の家庭内暴力に悩んで自殺を企て病院に運ばれるという設定がある。しかし、そこでは、友人の無事を祈るというような宗教的な描写は現

れない。イスラーム教徒が大多数で、宗教的な作法がしばしば現れるインドネシア国民の日常生活を考えると、このような状況描写には、特定の宗教の作法が目立つことを避けるための製作者側の意図(世俗性の重視)が見て取れる。

- 51) 体制批判という設定と同様に、注50で触れた家庭内暴力というような設定においても、この作品ではその原因が明示されておらず、単純に家庭内(個人間)の問題なのか、何らかの社会的要因があるのかといった文脈が明らかでない。
- 52) 例えば、現代タイの事例で河森正人が指摘しているように[河森 2002: 15-18]、インターネット掲示板など、近年のよりミクロで匿名性の高いメディアでは、このような(特に上流)中間層のアイデンティティー意識や従来の民族主義に対する反感や批判が、庶民大衆や下流中間層たちの側から表面化し始めており、インドネシアでも同様である。もっとも、テレビや映画など、既に商業的にも制度的にも様式確立が進んだメディアでは、少なくとも当面は、本稿で言及した映画作品のような(特に上流)中間層の社会文化通念を表象する表現物が優勢であると推測される。
- 53) スランクには、1983年の結成以来、富裕な中間層出身と推測されるメンバーも含まれており、そのため、彼らの歌は、政治的内容に限られず、中間層の若者世代の社会文化意識を表現するものも少なくない。その結果、スランクのファンは、庶民大衆だけでなく中間層にも幅広い。スランクの基本情報については、<http://www.slank.com/> を参照。また、彼らの歌詞に関する論考は北野[2001]を参照。
- 54) もっとも、このようなナイーブさにも拘わらず、スランクが体制批判とともに「然るべき共同性理念の存在」を強くアピールしたことそれ自体は、スハルト体制末期にかけてのインドネシアの社会文化的文脈においては軽視できない。このことによって、スランクが全国のリスナーの熱狂的な共感を獲得したと見られる。

## 文献

アンダーソン, ベネディクト. 1997. 『増補 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』, 白石さや・白石隆(訳). 東京: NTT 出版.

Arief Budiman, ed. 1990. *State and Civil Society in Indonesia*. Clayton: Centre of Southeast Asian Studies Monash University.

Ariel Heryanto, ed. 1985. *Perdebatan Sastra Kontekstual*. Jakarta: CV. Rajawali.

\_\_\_\_\_. 1994. Postmodernisme: Yang Mana?. *Kalam* 14: 80-93.

\_\_\_\_\_. 1995. What Does Post-Modernism Do in Contemporary Indonesia?. *Sojourn* 10(1): 33-44.

\_\_\_\_\_. 1996. Indonesian Middle-Class Opposition in the 1990s. In *Political Oppositions in Industrialising Asia*, edited by Garry Rodan, pp.241-271. London and New York: Routledge.

\_\_\_\_\_. 1999. The Years of Living Luxuriously: Identity Politics of Indonesia's New Rich. In *Culture and Privilege in Capitalist Asia*, edited by Michael Pinches, pp. 159-187. London and New York: Routledge.

- \_\_\_\_\_. 2000. *Perlawanan dalam Kepatuhan : Esai-Esai Budaya*, edited by Idi Subandy Ibrahim. Bandung : Mizan.
- Ayu Utami. 1998. *Saman*. Jakarta : KPG (Kepustakaan Populer Gramedia).
- Chua Beng-Huat, ed. 2000. *Consumption in Asia : Lifestyles and Identities*. London and New York : Routledge.
- Foulcher, Keith. 1990. The Construction of an Indonesian National Culture : Patterns of Hegemony and Resistance. In *State and Civil Society in Indonesia*, edited by Arief Budiman. pp. 301-320. Clayton : Centre of Southeast Asian Studies Monash University.
- Goenawan Mohamad. 1982. *Catatan Pinggir 1*. Jakarta : Pustaka Utama Grafiti.
- \_\_\_\_\_. 1989. *Catatan Pinggir 2*. Jakarta : Pustaka Utama Grafiti.
- \_\_\_\_\_. 1994. Revolusi dan Praksis Anarkis. *Kalam 1* : 71-79.
- \_\_\_\_\_. 1995a. *Catatan Pinggir 3*. Jakarta : Pustaka Utama Grafiti.
- \_\_\_\_\_. 1995b. *Catatan Pinggir 4*. Jakarta : Pustaka Utama Grafiti.
- \_\_\_\_\_. 2002. *Catatan Pinggir 5*. Jakarta : Pustaka Utama Grafiti.
- Hefner, Robert W. 2000. *Civil Islam : Muslims and Democratization in Indonesia*. Princeton : Princeton University Press.
- Jaringan Islam Liberal. 2002. *Wajah Liberal Islam di Indonesia*, edited by Luthfi Assyaukaine. Jakarta : Teater Utan Kayu.
- 河森正人. 2002. 「現代タイのメディア空間にみるアイデンティティの政治」『アジア太平洋論叢』12 : 3-20.
- 北野正徳. 2001. 「現代インドネシアの人気ロック・グループ<スランク>について ―カルチュラル・スタディーズ的アプローチ―」『倉敷芸術科学大学紀要』6 : 235-245.
- \_\_\_\_\_. 2002. 「現代インドネシアの国民文化における緊張 ―文化民族主義・文学評論・スハルト体制―」『南方文化』29 : 43-65.
- 小池 誠. 1998. 『インドネシア 島々に織り込まれた歴史と文化』東京 : 三修社.
- 今野裕昭. 2000. 「インドネシアの都市中間層 ―工業化と都市中間層―」『アジア社会の構造変動と新中間層の形成』古屋野正伍・北側隆吉・加納弘勝(編), 54-81ページ所収. 東京 : こうち書房
- 倉沢愛子. 1996. 「開発体制下のインドネシアにおける新中間層の台頭と国民統合」『東南アジア研究』34(1) : 100-126.
- 松尾 大. 1993. 「近代インドネシア文学の歩み」『現代インドネシア文学への招待』アイブ・ロシディ(編), 松尾大・柴田紀男(訳), 26-42ページ所収. 東京 : めこん.
- 見市 健. 2000. 「インドネシアにおける『イスラーム市民社会論』の二大潮流」『国際協力論集』8(2) : 159-179.
- \_\_\_\_\_. 2002. 「インドネシアにおけるイスラーム左派と知識人ネットワーク」『東南アジア研究』40(1) : 42-73.
- 中村光男. 1994. 「インドネシアにおける新中間層の形成とイスラームの主流化」『講座現代アジア3 民主化と経済発展』荻原宜之(編), 271-306ページ所収.

東京：東京大学出版会.

Nirwan Dewanto. 1994. Carut-marut yang Bikin Kagum dan Cemas. *Kalam* 1 : 4-11.

Philpott, Simon. 2000. *Rethinking Indonesia : Postcolonial Theory, Authoritarianism and Identity*. New York : St. Martin's Press.

Pramoedya Ananta Toer. 1980a. *Bumi Manusia*. Jakarta : Hasta Mitra.

\_\_\_\_\_. 1980b. *Anak Semua Bangsa*. Jakarta : Hasta Mitra.

Robison, Richard ; and Goodman, David S.G., eds. 1996. *The New Rich in Asia : Mobile Phones, McDonald's and Middle-Class Revolution*. London and New York : Routledge.

白石 隆. 2001. 『インドネシアから考える 政治の分析』 東京：弘文堂.

高山正樹. 2002. 「[書評] Chua Beng-Huat ed., "Consumption in Asia : Lifestyles and Identities", London, Routledge. 2000」『アジア太平洋論叢』12 : 119-128.

Tanter, Richard ; and Young, Kenneth, eds. 1990. *The Politics of Middle Class Indonesia*. Monash Papers on Southeast Asia No. 19. Centre for Southeast Asian Studies.

\_\_\_\_\_. 1993. *Politik Kelas Menengah Indonesia*. Jakarta : LP3ES.

土屋健治. 1994. 『インドネシア 思想の系譜』 東京：勁草書房.

オンライン文献 (2003年3月末現在)

[http : //www.adaapadengancinta.com/](http://www.adaapadengancinta.com/)

[http : //www.slank.com/](http://www.slank.com/)

# **The Recent Development of “Middle Class Theories” and Its Cultural Implications in Contemporary Indonesia : Potential Uncertainty in National Culture**

Masanori KITANO\*

This article discusses potential uncertainty in contemporary Indonesian national culture mainly through examining the recent development of "middle class theories" and its cultural implications. This subject is explored in terms of the following three fundamental principles of the Indonesian nation, namely, secular-plural cultural nationalism, modernism, and democracy.

The contemporary Indonesian middle class came into formation in the 1980s. Overall, its cultural, economic and socio-political orientation consisted of secular-plural nationalism, modernism, and democracy.

Today, this middle-class ideology is basically unchanged. However, from the 1990s, especially after the fall of the Suharto regime, Indonesian middle class theories increased their variety of orientations. This recent development includes four examples, as follows. First, some Islamists advocate Islamic principles instead of (secular-plural) cultural nationalism. Second, some moderate Islamic theorists still uphold cultural nationalism, but seek to relativise modernism. Third, a number of Islamic leftists pursue both cultural nationalism and radical popular democracy. Finally, some cultural theorists defend cultural nationalism and democracy, but relativise them theoretically and formulate few practical schemes for them.

As such, these theories suggest that the Indonesian nation, especially the middle class, needs to reassess cultural nationalism, relativise modernism, and also seek broader consensus about democracy. However, this situation has not yet come to the serious

---

\* Part-time Lecturer, Osaka University of Foreign Studies

attention of the majority of the nation, which conventionally attaches to cultural nationalism and modernism, and has just begun to participate in democracy in recent years. There is thus a discrepancy between the theoretical possibilities of these middle class theories and their actual conditions.

Culturally, this discrepancy implies a potential threat to cultural nationalism. This is because not only is it challenged by the Islamist ideology but also it might decay by itself for lack of its own conceptual reassessment and regeneration. Furthermore, the pursuit of radical popular democracy might affect cultural nationalism. This is because a considerable part of the Indonesian lower class, the proposed prime-mover of democracy, consists of either conventional nationalists who are unfamiliar with reassessments of cultural nationalism, or those Muslims inclined toward Islamist ideology. It is in this set of risk factors that the Indonesian national culture faces potential uncertainty.

In this context, the Indonesian middle class and its cultural expression deserve constant and close attention in order to understand this uncertainty in the national culture.